

第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 議事録

(1) 会次第等

令和3年度 第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議

会次第

日時：2022年1月24日（月） 15：00～ 17：00

場所：ホテルサンパレス球陽館 パレスコート

1. 開会・あいさつ
2. 第2回会議の振り返り
3. 議題
 - ①これまでの議論の整理
 - ・琉球文化の本質的価値
 - ・琉球文化ルネサンスのビジョン（将来像）
 - ・琉球文化ルネサンスの実現に向けた課題
 - ②次年度以降の議論の方向性について
4. 閉会・事務連絡

(2) 出席者

■委員

氏名	分野	職名等	出欠
波照間 永吉	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科長 教授	欠席
山里 勝己	文学	名桜大学大学院 国際文化研究科 教授	欠席
大田 静男	歴史	八重山歴史・芸能研究家	○
上里 隆史	歴史	琉球歴史研究家	○
いのうえ ちず	文化	雑誌「モト」編集長	○
富田 めぐみ	伝統芸能	合同会社琉球芸能大使館 代表 舞台演出家	Web
嘉数 道彦	伝統芸能	国立劇場おきなわ 芸術監督	○
小渡 晋治	伝統工芸	(株)okicom 常務取締役 琉球びんがた事業協同組合 特別顧問 「琉球びんがた普及伝承コンソーシアム」事務局長	Web
久万田 晋	民族音楽/民俗芸能	沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長 教授	Web
知念 賢祐	空手	沖縄空手道古武道連盟ワールド王修会 会長	Web

(3) 議事録詳細版

1. 開会・あいさつ

【事務局：山城班長】

委員の皆様こんにちは。本日、司会を務めます沖縄県知事公室特命推進課 山城と申します。会議を始める前に、本日の出席状況についてご報告いたします。波照間委員長は急遽都合により本日はご欠席となります。そのため、本日の会議進行につきましては「万国津梁会議要綱」第5条第4項に基づき、上里 隆史副委員長が行いますことをご報告いたします。久万田晋委員、知念賢祐委員、富田めぐみ委員、小渡晋治委員は Web による参加となります。また、県の関係課として、文化振興課、ものづくり振興課、空手振興課が参加いたします。

それでは、これより令和3年度第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁を開催いたします。

開会にあたり、島袋政策調整監よりあいさつがございます。

【事務局：島袋政策調整監】

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました政策調整監の島袋と申します。よろしく願いいたします。

本日はお忙しい中、「第3回 琉球文化ルネサンスに関する万国津梁会議」にご出席いただき誠にありがとうございます。特に知念委員におかれましては、本日フランスからご参加いただいております。早朝にも関わらずご参加いただき感謝申し上げます。

さて、本会議は昨年9月にスタートし今回が第3回目の開催となります。第1回、第2回会議におきましては、琉球文化ルネサンスに関する個別のテーマについてご意見をいただいたところでございます。本日はこれまでの会議を踏まえ、琉球文化ルネサンスの実現

に向けた課題と、今後の議題の方向性についてご議論、ご検討いただきますようお願いいたします。

今後につきましては、今年度中に中間報告を取りまとめ、来年度は琉球文化ルネサンスの実現に向けた具体的な検討を行ったうえで、知事へ最終提言を行っていただく予定でございます。委員の皆様におかれましては、沖縄の歴史や文化について幅広い視点から積極的にご意見を賜りたいと存じますので、よろしく願いいたします。

【事務局】

ありがとうございました。

嘉数道彦委員におかれましては、今回が初の参加になりますので、一言ごあいさつをお願いいたします。

【嘉数委員】

これまで1回目、2回目ともなかなかタイミングが合わず参加できないこと申し訳なく思っております。失礼致しました。国立劇場おきなわの嘉数道彦と申します。沖縄の伝統芸能に携わっている分野からできるだけお話をさせていただきたいと思っております。いろいろ私も勉強しながら先生方のご意見を伺っていければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

【事務局】

嘉数委員、ありがとうございました。

それではこれより議事に移りたいと思えます。上里副委員長、よろしく願いいたします。

2. 第1回会議の振り返り

【上里副委員長】

皆様こんにちは。副委員長の上里です。波照間委員長がご欠席ということで、本日代わりに議事進行を務めさせていただきます。コ

コロナ禍において、皆さんで集まることが非常に難しいですが、今年度最後の会議ということで、次年度以降の具体的なお話を進めていく、議論をどうしていくかということも含めて、皆さんから貴重なご意見をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは会次第に沿って、進行していきたいと思います。

まず、次第2の「第2回会議の振り返り」について事務局より報告をお願いします。

【事務局】

資料1 説明（省略）

【上里副委員長】

ただいま事務局が説明した内容について質問やご意見等ございますか。前回会議で言い足りなかった点、改めて付け加えたい点などございましたら、それもよろしくお願いいたします。

特にないようでしたら、続いて次第3の議題に移ります。まず、本会議の検討経緯を確認した後に、これまでの議論をもとに事務局にて整理した内容、「琉球文化の本質的価値」、「琉球文化ルネサンスの将来像」、「ルネサンスの実現に向けた課題」、「次年度以降の議論の方向性」、についてご意見をいただきたいと考えております。それでは事務局の説明をお願いします。

3. 議題

【事務局】

資料2、3 説明（省略）

【上里副委員長】

ありがとうございます。それでは「琉球文化の本質的価値」からご意見を伺いたと思います。これまで皆様と議論を重ねた中で、

資料3ができたわけですが、この資料3自体は、今後の県の文化政策を進めるうえでの一つの指針となる大事なものです。何か足りないことや、削除したほうが良いこと、文言や表現について各分野の皆様からご意見を賜りたいと思います。

【小渡委員】

「琉球文化の本質的価値」について、非常によくまとめられているなという印象です。一方で、この目的をどこに設定するかを今一度確認する必要があると思います。この「琉球文化の本質的価値」の文量で、例えば県民に向けて発信した場合、おそらく誰の記憶にも残らないと思います。そのため、しっかりと分量で細かく書く必要があると思いますが、では一言で言うと何なのか、どの部分を県民に覚えてもらいたいのか、といった記憶に残る表現も入ったほうが良いのかなと思っています。

また、可能であれば2行目の芸能の後に中ポツで工芸も入れていただけると嬉しいです。

【上里副委員長】

ありがとうございます。このことについて、事務局から何かございますか？

【事務局】

まず、文言について芸能のあとに工芸も入れるように修正したいと思います。

ご指摘のとおり、「琉球文化ルネサンス」がかなり抽象的で、ふわっとしたイメージを皆さんそれぞれお持ちだと思いますが、これをどう伝えていくかは、事務局としても苦労しているところです。これまでの委員の皆様の見解も伺い、県民にどうやって普及・啓発していくか、文化の本質的価値を県民にわかりやすくどのように伝えていくかは委員の皆様のかなり強い意識だと感じております。発信

方法やワンフレーズなど、どういう形で発信ができるかということは、委員の先生方と継続して検討させていただければと思います。

【上里副委員長】

ありがとうございました。文化的な本質的な価値は答えをすぐにだせるような簡単なものではないような気がしますから、引き続き今回定めた文言を足がかりにして次年度以降、更に踏み込んで検討していくのがよいと思います。

【大田委員】

本質的な価値というのはなかなか難しいと思います。どこの国でも同じような自然に対する畏怖というところから発展しているので、琉球に限った話ではないと思います。現代の世界において、本当に神に対する畏怖や自然に対する畏怖というのはあるのかと思います。ただ、集まって若者が意味もわからずに芸能をしている。そこにとうばら一まやエイサー等があり、エイサーも正月早々そういう声が聞こえてくる。だから、社会がものすごく変わっていくなかで、私たちの価値観は本当にこういう生き方でいいのかどうか。もっと検討する必要があるのではないかと思います。

【上里副委員長】

ありがとうございました。文化とは何か、という問題は非常に深いテーマではありますが、まさに次年度以降の具体的な議論についての1つのテーマになり得る話かと思います。ただ、この場で定めた文化的な価値というものが、絶対に正しいものということでは必ずしもありません。そこは少し留意しながら議論を進めていくことを少し意識しておく必要がある気がしました。

【富田委員】

様々な琉球文化の価値があると思いますが、個人的には2つの大きな価値があると思っています。

1つは、文化そのものが持っている価値です。例えば芸能に関して言えば、非常に洗練された格式の高いものから、雑踊のような本当に人の心を躍らすようなものがあったり、世界に普及したエイサーであったり、工芸に関しても非常に美しい世界に誇れる沖縄独自の文化があり、そのような私たちの目の前にある文化そのものが非常に素晴らしいという価値があることです。

もう1つは、上里副委員長が追加意見でも出されている歴史的思考というお話もありますが、やはりその文化を生み出すに至った歴史背景や、そこに込められた先人たちの哲学や叡智、思いのようなものも大きな価値を持っているんだろうと思います。非常に小さな独立国の琉球があれだけ大きな中国や日本本土と渡り合って、したたかな外交術、非常に高い文化、外の文化も取り入れ巧みに琉球独自のものにした芸能でのおもてなし等、文化そのものが持っている価値にプラスして、そこに入っている叡智があると思います。しかし、いま私たちの目の前にある文化を綺麗だと思い購入したりとか見たり触れたりはありませんが、その内包しているものに触れる機会が意外とないと思います。やはりあれだけ大きな国と国の狭間で非常に厳しい状況の中で、高い文化の力でしたたかに、しなやかに、たくましく渡り合ってきたというのが、それぞれの文化に見えないけれども、隠されているんだろうと思います。

現状をみてもやはり沖縄というのは47都道府県の、小さな県の1つで、日本本土の力やアメリカの力によってどうしても屈してしまう場面があります。その中で、私たちが引き継いできた文化の価値をもう一度捉え直し、

文化はそれぞれの時代の琉球の人たち、沖縄の人たちの生き様の集約だと思いますので、そこから学び取れる文化そのものの価値をみんなで認め合う、そこに込められているものをどのようにしてシェアしていくのかということと同時に進めていく必要があると思います。その意味では、上里副委員長が追加意見で出された歴史的思考の育成を強くこの取組の考え方の1つとして持つことが大切ではないかと思いました。

【上里副委員長】

ありがとうございました。琉球の小国としての文化のあり方としてのご意見でしたが、確かに、日本が中国とか大国の論理ではない、我々が置かれた環境の中で生み出された文化的背景というものが非常に今後伝えるべき重要な問題ではないか、という話だったかと思います。この点についても「琉球文化の本質的価値」のなかにいろいろ踏まえていければよいと思います。

それでは、次に進んでいきたいと思います。次は「琉球文化ルネサンスのビジョン（将来像）」について、ご意見をいただければと思います。こちらも追加や削除、文書を修正する等ご意見がございましたら、よろしく願います。

個人的な意見としてポツ点3の「琉球文化ルネサンスをとおして、琉球文化の新たな価値の創出や産業振興に結びつける」は賛成ですが、個人的に意識をしたいのは、文化はもちろん大事ですが、今後の世界、社会において文化というものがこれまで以上に重要な現実的な武器になると思います。沖縄県としてもしっかりとただ文化を保存するのではなく、実際にこれからの沖縄の武器の1つになるという意識をもって、この将来像を具体的に実現していくようなかたちで進めていただければと思います。

それでは、特に意見がございませんので次に進めたいと思います。次は「琉球文化ルネサンスの実現に向けた課題」について、ご意見をいただければと思います。

【いのうえ委員】

戦略的取組の必要性という言葉がありますが、この戦略的取組を誰が、どこで、どのように決めるのかがこれだけでは見えにくく、それが来年以降の検討課題の1つであるのかなと考えています。横断的な取組とか、持続可能な仕組みづくりというところで、県としてこれまでの文化行政での取組がそれぞれの分野で行われてきて、実を結んでいるもの、結んでいないものいろいろあると思います。そのあたりの評価をしつつ、では、どのようにしたらそれが琉球文化ルネサンスとつながるのかという視点で考えることが必要だと思います。

もう1つは行政の体制として、文化財のことだったら文化財課、何々だったらここ、とどうしても縦割りになってしまうので、この琉球文化ルネサンスのビジョンで求めているような横断的な取組というのが、やりにくいのではないかと感じます。その辺を横断的に、大きなビジョンのもとで動いていくためにはどうすればいいかっていう話し合いをする。これは今後の課題というご提案でよろしいのか、現状県のほうでどのように考えていらっしゃるのか、ちょっとお聞きしたいんですが。

【事務局】

ご意見ありがとうございます。その点も次年度議論していきたいことで、次の議題にも関わってくることでございます。先に申し上げますと、ご指摘の課題は万国津梁会議以外にも色々な審議会や新たな振興計画の会議でもご意見をいただいております。一番大切な

は、この我々が提言したものを誰がどのように進めていくのかが実効性を担保していくうえで重要だと考えております。そのあたりも含めて次の議題で詳しいご議論いただければと思います。

【上里副委員長】

ありがとうございます。いのうえ委員がおっしゃられたことも先ほど私が少しお話したことと通じると思います。つまり、今後、文化が具体的な沖縄の力になっていくことに際して、県がどれだけ本気度をもってそれを形にしていくのかが問われているような気がします。文化が重要であることはわかった。それでは県として今までどおりの体制でいいのか、あるいは組織の問題についても、今後踏み込んで文化政策に具体的に対応できるような形に変えていくのか、その点も含めて、今後議論していく必要があるように思いました。

「(4) 新たな価値(魅力)の創出」では、今後を見据えたデジタル技術の活用と他産業への活用の検討が載っています。その他各分野の委員の皆さんからこちらの創出について重要な提案や、内容を付け加えたりすることができるかもしれません。何かございますでしょうか？

【いのうえ委員】

今年の4月の終わりに首里当蔵でオープンする「首里染織館(Suikara)」の運営にも携わっておりまして、こちらはご存知の通り、紅型組合と首里織組合の新しい拠点施設となっております。この拠点施設の運営に関連して去年11月、12月に県外の着物好きの方々をお呼びして沖縄県内の紅型工房や組合を訪問して染め織りの現場を実際に歩いて、職人さんと着物好きの人が直接お話しをするような場をたくさん設けるというモニターツアー

を実施しました。末端価格は100万円で売っている紅型でも、紅型の職人さんに入るお金は本当に微々たるものです。それは流通の問題で、間に問屋さんや呉服屋さんが入ることで、どんどん値が上がっていくことが現状です。これは、長い歴史の中での商習慣があるので、一朝一夕には変えられませんが、それでも、例えば農産物を生産者から直接買うという仕組みができていたり、日本全国で流通の仕組みを見直す動きがあると思います。沖縄の工芸で考えたときに時に、京都の問屋さん任せっぱなしの現状はどうなのか、というのが本当に正直な私の気持ちです。紅型工房にお客さんをお連れし、2時間ずっと紅型について話していましたが、お客さんたちもとても興味津々で話を聞いてくれるんですね。その中に、例えば紅型の成り立ちとして植物性染料よりも顔料を使うというのは、中国と交易の歴史があったからですよ。いつからこういうふうに交易が始まって、このような外交の歴史があって、その中でこういう風に紅型が育ってきて、というような歴史的背景の話をする、今まで単に綺麗なものだと思っていたけどこんなに深い意味がある、歴史があるんだと実感していただけてお買い上げくださったお客さんもおられました。ここまで手の込んだものなんだ、手作業で1つ1つ作っているものなんだって納得された上で、喜んで買っていただいた経験がありました。このようなことが多分、他の工芸のジャンルでも充分起こりうるだろう、あるいは芸能のジャンルでも充分あるだろうと思います。前回の会議のときに、上里さんから、見る目が肥えている富裕層の方々を相手に文化を発信する時は、やはりこちらにもハイクオリティなものを用意しないといけない、というようなお話があったかと思いますが、それらがすべて私の中では紐づいてきました。来年以降、Suikara でいろいろそういう展開も考えたい

など思っていますが、文化を産業に活用するというよりは、伝統的な産業の後ろに文化があり、産業を育ててきたものそのものが文化なので、そこをきちんと各産業に携わっている方々にも理解して欲しいし、買いに来てくれるお客さんにもわかってほしいし、周りにはいる人間もそれをわかったうえで情報発信しないといけない、と思いました。そこでこの琉球文化ルネサンスのビジョンに少し戻りますが、ポツ点1「県民一人ひとりが地域の歴史・文化への理解を深め、自信と誇りを持つ」はそのとおりですが、もう一步踏み込んだ表現で普及・啓発、教育いろいろな表現があると思いますが、何かもう少し踏み込んだ表現ができないかなと感じています。

【上里副委員長】

ありがとうございます。観光でもよく言われている量から質へという問題。やはり本物を見せていくということが、今後の沖縄の文化に関する1つのキーワードになるような気がします。それに関連してですが、こうした取組も踏まえて、嘉数委員からこの点について何かご意見がございましたらお願いします。

【嘉数委員】

私たち芸能分野にしてもどちらかというと、先人たちが築いてきた素敵な芸能に、ある種少し甘えているところがあるのかなという気もしており、まだまだ勉強不足な点が多くあると感じています。今のいのうえ委員のおっしゃった工芸に関する点ですが、私たちは芸能の中で、自然と伝統工芸品を身につけているものの実際にどういうものだったか、歴史や背景に関する知識が乏しいのです。それは、もちろん多くの県民や県外の方もわからないことが多いのですが、わかればわかるほどその深みを知って、さらにその魅力を感じ

ていただけるということを伺いましたが、実際芸能に携わっている方ですらそこまでいけていないという現状もあると思います。特に本物をつけて演じることはすごく素敵なことですが、それが徐々に簡素化されている現状もあり、本物がなかなか手にしづらいという状況である、ということも一理由になるかもしれません。本当にしっかりとした芸能を、自信を持って見せることができる環境が整っているかという点、まだ今はそうではないと感じています。私達ももっと学んでしっかりしたものを伝え演じていかなければいけないということと同時に、どうしても舞踊だったら舞踊だけを一生懸命やってそれ以外が目に入らないこともありますので、その沖縄の伝統文化、全てを網羅した形で一体的に推進するという記載は理想ではありますが、ではどこがそれをまとめて進めていくのかという問題があると思います。個人的な意見を述べますと、やはりそこは沖縄県にまとめていただきたいと思うのですが、おそらく県のほうでもそれが、今すぐできる状況ではないのかなと感じています。そのため、私たちの世代を含め、次世代の文化に対する感覚をもっと養っていく、つくり上げていくことは、今本当に大切な時期だと思います。皆さんが、沖縄の文化が素晴らしい、重要だということは言っていると思います。しかし本来の重要性、本当の大切さを認識せず、先人たちが作った文化だけの素晴らしさを述べて、甘えていては、足元を掬われかねない状況にあるのではないかと危機感も持っています。口で言うことは簡単で、それをどうしていくかが、今後の、大きな課題だと思います。県が進めるのであればどのように進めていくかは県庁内だけでできることでもないでしょうし、今いる沖縄県民の皆さんの知恵を1つにして、大切に考えていく。そしてまた、そう考えてくれるような次世代をつくっていくこと

も進めておかなければ、また同じような繰り返しになってしまうという面で普及活動というのとも必要です。ただ、どうしても文化・芸能というのは結果や成果が数や文字でなかなか現れづらい面があるので、現代社会においては非常に苦しい立場で、予算をつけづらいという点も正直あるかと思います。しかし、だからこそ、沖縄だからこそやらないといけないという方向性を打ち出すことがないと、ルネサンスという言葉には似合わないような気もしております。皆様の意見や前回までの資料を見ながらそのようなことを感じておりました。

【上里副委員長】

嘉数委員は伝統をこえて様々な新しいところにもチャレンジされていることはご存知の方も多いかと思います。今のご意見のように嘉数委員が取り組まれている様々な取組と、そこからの課題の解決など、次年度も更に具体的なお話を聞かせていただければと思います。ありがとうございました。

【久万田委員】

先ほど戦略的取組の主体はどこかというお話が出ましたけれども、同じように、(2)、(3)、(4)と見ていると、例えばプラットフォームの構築であるとか、(4)のデジタル技術などの活用というものがありますが、発信ということはどこに向けてやるかというところがこの文面だと弱いと思うんですね。「(2) 持続可能な仕組みづくり」でしたら、2番目に収集発信するプラットフォームの構築とありますが、構築してどこに発信するのか、沖縄県民に発信するのか、県外の人に発信するのか、国外の人に発信するのか、やはりそれぞれによって戦術が違うので、それをもう少し明確にする必要があると思います。それから「(3) 文化的価値の普及・啓発」も

そうですが、専門性を持った人材の育成もありますが、発信においても、専門的な発信するだけのスキルを持った人材を登用しなければ、工芸家や芸能家の誰もが全部できるかという、そうではないので、そういう発信できるスキルを持った人材を確保するということはやはり必要だと思います。

(4)は少し違うかもしれませんが、デジタル技術にしても、沖縄県民や琉球文化に携わっている人たちが自らデジタル技術を活用する、ということもありますが、デジタルコンテンツにしてみれば世界同時に誰でも見れるということです。要するに日本語やうちな一ぐちだけでは通じないわけです。そこにきちんと各国語の字幕やテロップを入れるのかも発信していくということですから、やはりデジタル技術のところでも、どこに向けて発信するか、をもう少し明確にする必要があるのではないかと思います。

【上里副委員長】

非常に重要な指摘だと思います。専門人材というのは歴史文化に関わらず、発信も含めたある意味、中間的な役割を持つ人たちも同時に育てていかないといけないと思います。つまり、歴史や文化だけを知っている人たちをただ育成するみたいなのは別に、それをしっかりと効果的に広められる、伝えられるという必ずしも研究者ではない人たちが必要になってくると今後は思いますので、その点も含めた提言だったかと思います。

【知念委員】

外国でいろいろと今まで活動してきました。伝統文化は先人達が築いてきた歴史があり、今まで我々に永遠と続いて、受け継がれているわけですが、それを受ける今の人たちの未来までつないでいく意識はどこまであるのか、責任感の問題、人材や教育の問題等いろいろ

出ると思います。でも果たして入口と出口の均衡がとれているのか。いくらいろんなことを編み出して頑張ったとしても国内だけで消化するのか、国外で消化するのか、それとも山を広げられるのか、そのような入口と出口の調和が取れていないと量だけ生産しても意味がないと思います。様々な分野で様々な方々が学校を作ったり、そういう場を増やしたりして、広げること自体はいいと思います。また、それがなくてはいけない課題です。ただ、どこまで広げるのか、広げるだけでいいのか。量だけ生産しても、役に立てる、持っていける場所がないとまずいと思います。そういう意味で、将来に向けて現代の人たちが責任としてやっていかななくてはならない課題です。今の若い人たちへのバトンタッチをどうするのかということも兼ねていく必要があると思います。

空手の場合は、先人が残した大事な文化が今は沖縄だけでなく、世界的に一応は広がっています。量的には広がっていますが、はたして質ということになると、沖縄の先人が望んだ方向性なのかどうか、外国でそれが行われているのかどうか。沖縄の責任のもとにリードしていかないと、本当の意味での歴史が歪曲されて、各国でその正確さが伝わらないのではないかと危惧しています。結局、沖縄空手は魅力があるからそれだけ世界に広まっているわけですから、沖縄県民や、沖縄で空手に従事する人たちが責任を持たなければなりません。例えばワクチンでも、自分の国だけで解決できないように、国際社会は一国だけでは物事がなされません。だから、そういう意味でシェアをもっと広げて国内で決められることが、どこまで応用できるのか、そういうところも具体的に話し合う必要があると思います。

また、歴史的なことという、革新的に前に進めるよりも、守る部分の伝統に重きをお

いている人もいます。そのため、本当の意味での伝統文化とは何なのか、何のためにあるのか、ということは非常に難しい課題ですが、やはりそれを打ち立てていかないと、外国には発信することも、納得させることも、これからは難しいのではないかと思います。だからこれからは入口と出口のバランスについて話し合っていく必要があるんじゃないかと思っています。

【小渡委員】

今年、内閣府、OCVBの方で行われていたツーリズムをつくる事業も採択を受けておりました。紅型コンソーシアムと琉球料理保存協会、琉球伝統芸能デザイン研究室、泡盛倉庫で連携し、芸能、料理、工芸と芭蕉布を絡めた6泊7日のモニターツアーを実施しました。こちらの意図としては、それぞれが琉球王朝文化という1つの軸で、お互いに関係を持ちながら育まれているという点で、工芸なり、芸能なり、空手なり、それぞれが発展してきたところから、横の連携がどう繋がっているのか、という部分を伝えようということでモニターツアーを企画し、売り出してみたところをございまして、その報告をさせていただければと思います。初めての試みだったのですが、お客さんからのリアクションは非常によかったです。沖縄ファンで料理なのか、工芸なのか、芸能なのか、何かしらのファンの方々が、そこに行きたいから、例えば紅型がやりたいから、とりあえず全部知る等、そういう何かしらのきっかけをはじめとして琉球文化のもっと深い部分を伝えるコンテンツになり得るのかなと感じました。一方で、それぞれのコンテンツを提供してくれる琉球料理の先生や、芸能の先生は、これまではそれぞれが活動してきたこともあり、紅型とどうつながっているのかとか、芸能と料理はどうつながっているのか、などのストー

リーを伝える部分まで至ってなかった、という反省点がありました。このようなものを、実際にコンテンツを提供するメンバーが互いのコンテンツを見てみるとか、実際に体験をしたり、話を聞いたり、もっと交流をすることでコンテンツが作られていくことを実感しましたので、ご報告させていただきたいと思います。

もう1つご案内したかったのが「新しい価値の創出」の部分で、ツーリズムと沖縄の文化などを連携し、発信していくことはまさにそうだと思いますが、現状、このテクノロジーの最先端を考えると Web 3.0 という言葉があります。Web 1.0 はヤフーやインターネットエクスプローラーなど検索エンジン。Web 2.0 というのが、いわゆる GAFAM と言われる Google、Apple、Facebook、Amazon、Microsoft、こういった1つのプレイヤーがインターネットの上でサービスを展開したというものです。Web 3.0 は「ウェブスリー」と表現しますが、ブロックチェーンという新しい技術によるもので、去年の12か月間で30兆円規模に急に膨れ上がったマーケットです。それは NFT (Non-Fungible Token) というもので非代替性の印みたいなのです。これを例えば紅型のデザインに対して NFT で発行すると、イーサリアムやビットコインのような暗号通貨で購入をしてもらう仕組みが立ち上がっております。これらはカルチャーやコミュニティのようなものがすごく密接に関わっている内容になっています。例えば沖縄県の空手のすごい先生の突きをデジタル化して NFT にすると、それを配ることができます。これは必ずしもお金に結びつける必要はないですが、コミュニティを育むこと、知ってもらうことや情報発信にも利用できると思います。この Web 3.0 は今後のキーワードになってくると思っています。ぜひ、(4)に一言を加えていただけると、今、世の中で起こって

いるものを踏まえつつ、それに向けて検討を深めていく姿勢が表現できるのではないかと思います。

【上里副委員長】

小渡委員の NFT に関する記事は拝見させていただきました。要するにデジタルの世界において、唯一無二のオリジナルを創出しているというような形で今、世界でも進んでいる。その流れを汲んで沖縄の伝統工芸とあらゆる文化をそこに落とし込めるんじゃないかというふうなお話だったと思います。ぜひ(4)にそうした動向も踏まえて提案できるような形にしていいただければと思います。

それでは議事を進行していきたいと思えます。次に、こうした課題整理を踏まえて、琉球文化ルネサンスの実現に向けた具体的な検討に入っていきますが、その検討の方向性の案、次年度以降の会議の進め方について事務局より説明をお願いします。

【事務局】

資料3、5 説明(省略)

先日波照間委員長と打合せさせていただいた中でも、やはりテーマが非常に抽象的なため、次年度は、例えば先進事例など、具体的にイメージしやすい形で議論が進められるといいですね、というような趣旨の意見をいただきましたのでそこもあわせてご報告させていただきます。事務局からは以上です。

【上里副委員長】

ありがとうございました。ただいま事務局から説明のあった内容について皆様からご意見をいただきたく思います。今後の議論の方向性については追加すべき事項、修正を加える事項などがあれば、ご提案いただければと思います。特に具体的なお話に今後も入っていきますので、委員のそれぞれの分野からこ

の問題点についての現状の把握、そして本年度定めた資料3の指針と、どのようなギャップがあって、どのように埋め合わせていけばいいのか、その間をどのようにすればいいのかということも議論にできるような気がしますので、その点について皆様からいろいろとご意見をいただければと思います。

これまで具体的なテーマでお話をしてきましたが、まず教育のあり方について具体的に議論が進められないか、と思います。先進事例として、これまで何度か出されている中城村ごさまる科、そして場合によっては他府県の事例も参考にしてもいいかもしれません。教育に関して、現時点では沖縄県内でどのような取組がなされ、実際どのような課題があり、その課題を解決するためにどのようにしていけばいいのか。そのような歴史教育の部分で1つ議題ができるような気がします。

もう1つは、こうした文化政策を進めるにあたり、県の組織のあり方の課題、現状どのような形で文化政策が進められているのか、全体としての外観と、そこからこのように改善したらよいのではないかなど、そうした問題が提起できるように思います。この場合は県の担当の方にご出席いただいて、いろいろと解説をしていただくような形になるかと思っています。

それでは知念委員をお願いします。

【知念委員】

空手の場合は空手の歴史教育を教える道場は少ないですが、例えば外国でも、空手の有名な先生方の歴史やその人が作った型などを試験の中に織り込んでいくという試みがあります。しかし、沖縄で実施しているところを聞いてないので、沖縄が率先して昔の先生方を検証して、子供たちやこれからの若い人達に教えて繋いでいかないと、沖縄の価値は技だけなのかということになります。やはり技

だけになると、根っこが動いてしまうので、沖縄が本場といわれる由縁はどこにあるのか、ということになります。そこを位置づけるためにも、実技と歴史を同時に教えることが出来る先生方を養成していくことが必要でないかと思います。やはり空手で人間をつくるというのは、伝統空手の銘打っての方向性ですので、人間形成というからには、その教育の面が必要だと思います。実技の中にも物理的、科学的、内面的な哲学がたくさん入っています。また、今まで先人の遺した言葉もいっぱいありますし、その先達の足跡をたどるだけでもすごい勉強になり、人生の鏡にもなります。真摯に鍛えるからには、体を鍛えることと同時に、内面は教育を受けていかないと、先人達に一步でも近づいて、そういう人たちを1人でも多くつくっていくことが大きな課題ではないかと思います。

【上里副委員長】

ありがとうございました。空手に対する取組の再検証や新しいあり方について議論した方がよいという意見だったと思います。

小渡委員、お願いします。

【小渡委員】

この会議体の持ち方に関してです。知念先生のコメントなど、出口の考え方やどう世界を意識するかといった切り口は、なかなか沖縄県内にいる我々からはパッと出てこないコメントだと思います。また、このようなZoomの会議等も世界的にかなり当たり前になってきていると思います。世界には成功されているウチナーンチュの方々もたくさんいらっしゃるのです、そのような方々も入れて各部会をつくり、議論していく方が琉球文化を復興するという運動の中で、独りよがりにならない内容になるかと思っています。

もう1つ、事例として、石垣島に工場があ

るユーグレナという会社は CFO（チーフフューチャーオフィサー）ということで、18歳未満の方を経営執行役員というタイトルをつけて意見を聴いています。若い方々の意見や、彼らが何を考えているのか、何を感じているのか、どういったことをしているのか、そういった声は、我々がここで議論するよりも、実際の10代や20代のほうが全く違う視点で議論ができると思います。当然誰でもいいわけではなく、しっかりと選定する必要があると思いますが、我々が伝えていきたい先の世代をいれていかないと、結果出来上がったものがすごく頭でっかちになってしまうことや、実際にその世代にささらないようになってしまう場合があるかと思いますが、この部会や会議体をつくっていく中で、多種多様な意見を取り入れられるような会議体を持つことがいいのかなと思いました。

【久万田委員】

先程の知念委員の方で空手でも試験的なものがあるかと言われましたが、それに関連して、沖縄検定のようなものをもう少し組織的にきちんと行ってもいいのではないかと思います。これは大学に入って勉強すればいい、ということは別に、一般の沖縄に観光に来られる人の関心を喚起することが必要だと思います。例えば京都検定や、地域によっては坂本龍馬検定とか、全国の歴史ファンが喜ぶような取組が行われています。京都検定をみると、やたらと神社仏閣の細かな問題とかがありますが、そこはいろいろなやり方があると思います。沖縄県は10年ぐらい前に尚副知事の時に一度お声が掛かって、私もだいぶ問題をつくりましたが結局立ち消えになってしまいました。沖縄市でも沖縄市エイサー会館でエイサー検定の問題をつくっていますが、これもなかなか盛り上がり欠けている状況です。もっと全県的なバックアップでもって

やるべきではないかと思います。また、特に沖縄は、ゆるキャラも弱いですよ。頑張っているのは南城市の「なんじい」ぐらいで、沖縄を代表するようなゆるキャラで関心を引き付けることが他府県に比べてかなり弱く、そういうのが情けないと感じます。もう少し沖縄検定のあり方にしても、一般の観光や修学旅行に来られる若者を惹きつけるような魅力や仕掛けを県全体で本気になって考えることも必要ではないかと思います。

【上里副委員長】

ありがとうございます。検定につきましては、いのうえ委員がかつてすいまち検定を実施されていたかと思いますが、その点についてご意見いただければと思います。

【いのうえ委員】

昨年度、首里まちづくり研究会ですいまち検定というのを実施しました。首里や首里城の歴史だけでなく、伝説の蕎麦屋の名前をあてるなど、首里の町で生活するとか首里の町が好きという人ではないと満点を絶対取れないだろうなという構成にしました。その時に感じたのが、1つの弱小NPOが実施するには、非常に経済的に無理があるということです。Web上で検定をするにしても費用がかかるので、きちんとした経済的な基盤がないと継続はできないな、ということを実感しました。我々の場合はしまたて協会から助成金をいただいて運営しましたが、本年度はこれがないので、ちょっと継続かなり厳しいね、という話をしているところです。一般向けの興味関心をひく、という久万田先生のご意見非常に素晴らしいなと思いました。私もぜひ何らかの形でバックアップがあればよいと思います。自走できるまで大きな規模になったらあとは雪だるま式に転がっていける。スタートアップでその目標に乗れるまではバ

ックアップがないと難しいだろうなと思います。

【上里委員】

ありがとうございました。すいまち検定、その他の検定も含めて、あと PR ですよね。沖縄の歴史、文化を PR するための様々な取組について議論のテーマにしていくということが、久万田委員といのうえ委員の意見だと思います。

また、小渡委員の意見もすごく重要な指摘だと思います。特に若い方を招いて、若い方たちが歴史文化についてどういうふうに捉えているのか、我々とはまた違った視点が必ずあるはずだと思います。その点私自身もぜひ取り入れていただきたいなと思います。

【小渡委員】

ちなみにですが、例えば検定を受けた方に NFT のトークンを配るといった事例が世界ではいろいろ出てきています。トークンが欲しいから検定を受けるということです。昔のビックリマンのカードを集める感覚に少し近い部分です。このような事例で、クリプトパンクやボードエイプヨットクラブのようなコミュニティを作り、トークンを発行することで、これまではすいまち検定を受ける人は沖縄が好きな人にまずは限定されると思いますが、デジタル世界の向こう側にいる人たちもアクセスすることができ、それをきっかけに知ってもらい、ファンになってもらうという部分のアプローチもできるのかなと思いました。また、資金調達という観点でも活用しようがあるのかなと思いますので、もう少し議論を深められたらいいなと思います。

【上里副委員長】

ありがとうございました。まさに今後具体的にいろいろ議論して進めていくお話だと思います。

いました。

では、いのうえ委員お願いします。

【いのうえ委員】

その前にそもそもこの戦略的取組がどうあるべきかを話し合う場なり、組織体なりが必要だろうと思います。久万田先生のどこに向けて発信するのか、知念先生の入口、出口という視点も非常に重要だと思いますが、そもそもどうしたいのか、というのを決める体制についてぜひお考えいただきたいと思います。

【上里副委員長】

個別の具体的なテーマはもちろんですが、そもそも論ということで、これをまず大前提として議論する必要があるように思います。組織のあり方も含めて関連してくると思いますので、その大テーマを次年度以降の議論の1つにさせていただきたいと思います。

【富田委員】

先ほどから教育のお話も出ていて、また若い世代も含めて、こうした議論に加わっていただくというのも非常に重要な視点だと思います。もう1つ、専門的なことに携わっている人たちだけではなくて、一般の県民や、行政に携わっている皆様と一緒に議論を進めていくことも必要ではないかと思います。県や市町村の職員の方々は部署を異動して来られますので、文化行政に携わっている方は自分たちの期間の3年間は、そういったことに触れることがあると思います。例えば私は県の文化観光戦略推進事業というのに10年携わっていますが、最初の頃を思い出すと、例えば劇場に入ると、すぐに舞台ができると思って職員の方も結構いたんですね。例えば、照明や音響のセットやリハーサルをし、衣装を着替えて、お化粧もしてはじめて舞台が出

来上がる、ということと一緒に事業を進める中で、行政の皆さんに過程をみていただきました。私たちも逆で、このような行政の事業をやるためには予算書が必要なんだとか、わからないことがたくさんありますが、一緒にやる中でだんだんとお互いに学んでいくということがあると思います。専門職それぞれの分野で、技術を高めていくのも大切ですが、横断的に分野を超えて、民間と行政を超えて、大きなことでなくてもいいので取り組むこと、機会を増やすことがとても大事だと思いました。一度ものづくりの現場を体験されている方は、ほかの部署に行っても想像力が働くというか、その機会をいかしていけるのではないかと思います。ぜひ今後の議論の中にどのようにして文化に携わっていない方々、分野の違う方々、行政と民間一緒に進めていくのか、ということを取り入れていただければと思います。

【大田委員】

久万田先生からお話がありましたが、私は検定ではなくてもいいのではと思います。実は25年程前にクイズを作って、老人施設や学校教育の方から大変喜ばれました。歴史を知るということは、お年寄りや子供たちも喜んでいましたので、そのような取り組みもいいかと思っています。

それから、工芸と産業を結びつけるという議題も次年度はもっと検討していただきたいと思っています。例えば、八重山上布は紬手がいくら研修しても定着しないということで、大変困っています。将来、苧麻糸が別の地域から入ってくる可能性もあります。そうすると八重山上布の定義はどうか、ということがあります。踊りにしても民俗芸能が近代的な舞台で演じられている中で変化しており、それをどうしていけばいいのか、ということもあります。次年度からは現場の人の声も聞

きながら進めていただければと思います。

県に尋ねますが、宮古の人の話を聞くため、会議資料は見せてもいいのですか？

【事務局】

この会議はフルオープンで資料や議事録も含めても全て公開しているので、そこは全く問題ありません。

【上里副委員長】

ありがとうございます。離島のいろいろな立場の方からのご意見をいただくことは非常に大事かと思っています。第1回目もそのご意見が出たと思いますが、八重山だけではなくて、宮古やその他様々な歴史文化に携わる離島の方々いらっしゃいます。本島だけではなく、沖縄の離島をテーマにして議論を進めるのも重要かと思いました。そちらもぜひご検討いただければと思います。

これも前回お話ししましたが、デジタルコンテンツの歴史、文化の中でのあり方、進め方みたいところを議論してもいいような気がします。私自身も文化財やVRなどの政策にいろいろ携わっている中で、少しずつ沖縄県内で増えてきています。そして全国の事例を見ると、沖縄よりも全然進んでいるというような状況で、これからのデジタルコンテンツがますます重要度を増していく中で、県としてどういうふうに進めていくのか。市町村も全部含めた上でのあり方みたいところもぜひご議論いただければと思っておりますので、その点もよろしく願います。

今回の提案は次年度以降も、もし皆様が何かありましたら取り入れていくと思いますので、思いついた際にでもよろしく願います。

いろいろご議論いただきましたが、そろそろ議論を終了したいと思います。委員の皆様のご活発な発言と進行へのご協力、大変ありが

とうございました。本日の内容につきまして
は、事務局にて議事録としてまとめたうえで、
後日皆様にお伝えしたいと思います。また、
本日の議論の内容を踏まえまして3月中には、
中間報告書を取りまとめ、玉城知事にお渡し
をする予定になっております。中間報告書の
作成に関するスケジュール等については、こ
の後事務局より説明いたします。それでは、
進行を事務局にお返しします。よろしくお願
いします。

4. 閉会・事務連絡

【事務局】

どうもありがとうございました。上里副委
員長、委員の皆さん貴重なご意見ありがとう
ございました。

今後の予定についてですが、先程会議の中
で説明がありましたとおり、本日の会議の結
果を踏まえて、事務局の方で中間報告書の素
案を作成いたします。

素案につきましては、2月中旬頃、皆様に
メール等にて意見照会をさせていただき、3
月上旬までに中間報告書（案）の確認依頼を
した上で、3月末には知事へ直接提言してい
ただく予定です。

委員の皆様におかれましては、短い期間で
の作業をお願いする形になり申し訳ありませ
んが、ご協力の程よろしく申し上げます。具
体的な知事への手交式等の時間につきまして
は、委員長、副委員長と相談しながら追っ
て詳細を連絡いたします。

今後のスケジュールについて、ご不明な点
等ありますでしょうか。

【大田委員】

次年度は宮古の委員をぜひ追加していただ
きたいと思います。

【事務局】

次年度の進め方については、離島や新たな
テクノロジーなど本日のご意見をふまえて、
検討していきたいと思えます。

事務局からの連絡事項は以上でございます。
これをもちまして令和3年度 第3回「琉球
文化ルネサンス」に関する万国津梁会議を終
了させていただきます。

皆様、本日はありがとうございました。